

文系学術論文における判断表現の使用実態

早川 幸子・古本 裕子・苗田 敏美・松下美知子・岡沢 孝雄

I. はじめに

「判断表現」は事実に対する筆者の判断を表明する表現である。理系の専門分野で日本語論文を書く場合、特に「と考えられる」「と言える」「と思われる」がよく使われている(佐藤ら1997)。「と思う」「と言える」「だろう」については、文法の立場からそれらの用法や機能を明らかにしようとしている研究もある(森山1992, 2000, 寺村1984)。理系の論文作成マニュアルにこれらの表現についての説明があるが(木下1981)、実態を調査したものは少ない。また、文系については調査があまり進んでいない。

そこで本研究は、文系の学術論文雑誌における「と考えられる」「考える」「と思われる」「と思う」「と言える」「だろう」を取り上げ、以下の4つの目的で調査を行う。

- 1 判断表現のうち「と考えられる」「考える」「と思われる」「と思う」「と言える」「だろう」について、文系の学術論文雑誌における使用の実態を調べる。
- 2 上記の6つの表現について、判断の根拠の有無の割合を文系の雑誌で調べる。また雑誌間で差があるかを調べる。
- 3 判断表現の4機能(当然の帰結, 個人的判断, 言い換え, 予想・評価)がどのような割合で使われているかについて、3誌全体の傾向及び雑誌間の差を調査する。
- 4 各雑誌に見られる判断表現の出現傾向と各雑誌の分野における論文の特徴との関連を見る。

II. 方法

本調査では『日本語教育』、『日本語の研究』、『日本近代文学』の3つの雑誌からそれぞれ10本の論文を調査対象とした。これら3雑誌は専門教員にその領域で権威があるとして選ばれたものである。2004~2006年の上記雑誌から原著論文を抜き出した。調査資料の概要を付表に示す。

判断表現のうち、論文でよく使用されている文中と文末の「と考えられる」「考える」「と思われる」「と思う」「と言える」「だろう」を取り上げた。なお、「であろう」は「だろう」に含めた。この際、実質的な意味を持つ本動詞は除外した。6つの表現の

タ形やテイル形も取り上げた。「と言えるだろう」のように判断表現が2つ続く場合は前者の「と言える」のみ取り上げた。「と思われるのだ」は「のだ」を省いた。また、「と言えない」など主張の否定は除いた。なお、調査対象は論文の本体の部分のみで、標題、要旨、注、文献、付録は除いた。

分類基準 佐藤ら(1997)は客観性が要求される学術論文においては、判断を下す際にその根拠を示すことが必要であるとして、判断の客観性の度合いを見るために、判断の根拠があるものとないものに分類し、分析を行っている。本研究でも、佐藤ら(1997)と同様に根拠の有無による分類を行うが、根拠ありと根拠なしの定義は佐藤ら(1997)のそれとは異なる。

根拠有無分類 判断表現を「根拠あり」と「根拠なし」に分類し、さらに「根拠あり」を「明示的根拠」、「暗示的根拠」に下位分類した。

1) 根拠あり

①明示的根拠 判断を示す表現が用いられ、根拠とその論理的帰結としての判断との関係が明確に示されている場合である。根拠を示す表現のマーカ―は「以上から」「以上のように」「いわば」「ことから」「この結果から」「このように」「したがって」「すなわち」「それゆえ」「たとえば」「ため」「つまり」「と」「なぜなら」「により」「ので」「の場合」「ば」「ゆえに」「ように」「よって」などの表現や、連用中止形やテ形で原因や理由、方法を表すと解釈できるものなどである。

以下の例文¹では「~~~~~」は根拠を、「_____」は根拠を示すマーカ―を、「_____」は判断表現を示す。

(1)この4形式(「と・ば・たら・なら」の使い分けは、地域差も大きく、母語話者(例えば日本語教師)にとってすら難しい問題である。したがって、日本語学習者には依然、困難な項目といえる。(『日本語教育』4:28)

(2)変体漢文においては、助詞や助動詞の類を表現することが難しく、特に「已然形+バ」の形式によって、原因・理由の表現を示すことが困難であるため、もともと抽象的な意味を有していた「間」が、文と文の接続関係に転用されることになったものであろう。(『日本語の研究』4:179)

②暗示的根拠 根拠と判断の論理関係を示す明示的な表現はないが、前後の文脈等から原因や理由、方法などが示され、筆者が根拠を示していると判断したものを指す。

(3)「棄教」後「自分が不遜にも今、聖職者しか与えることができぬ秘蹟をあの男

1 例文の出典は付表を参照。雑誌名、論文番号、ページの順に示す。

に与えた」と言いながらも、その秘蹟授与を否定しないロドリゴは、個人であると同時に、依然司祭だとも言える。（『日本近代文学』8：132）

- (4)晩年の「最初に作者と友人の小説家の対談というものがあると、後の批評に影響するんですよ。みんなそのパターンをなぞって書くから」という遠藤の言葉には、自らの文学的テーマを流布させるために、批評・研究体系も利用していく作家の姿が見えるだろう。（『日本近代文学』3：125）

2) 根拠なし 根拠が示されていないものを指す。

- (5)文化化論の成立と90年代を中心とした盛況ぶりを理解するには、そうした「妥当生成文法」の流れの中での役割を理解することも不可欠だと思われる。（『日本語の研究』6：109）

- (6)聴解において語を知っているという状態は、ある音素の連続を正しく認知することができ、その音素列の情報を基に心的辞書の単語にアクセスでき、その意味表象を正しく想起できることであると考える。（『日本語教育』2：80）

佐藤ら(1997)は、判断根拠があるものとないものという分類に基づき分析を行う中で、根拠不提示の「と考えられる」の例として次の例文を挙げている。（下線は加筆）

- (7)また、いずれの固化体においても Tf 以上の燃焼温度で D2が減少する傾向を示すが、これは固化体内の閉口気孔に残留する気体の熱膨張によるものと考えられる。（『日本金属学会誌』：609）

この例文を見ると、筆者は明らかに波線の部分を根拠として判断をしている。ただ、その根拠から判断内容が当然の帰結として客観的に導き出されるものでないというにすぎない。この場合は、根拠から導かれる判断の可能性が複数ありうるうちの一つを筆者が個人的に判断として挙げている例である。

しかし、同じ根拠から、客観的に一つの判断が導き出される場合もある。次の(8)は前者（筆者の個人的判断）の例であり、(9)は後者（当然の帰結）の例である。

- (8)中国・台湾は読解では既知語率が高く、内容理解とも相関が高かったことを考慮すると、語の認知が音声より形態からのほうが、聴解では単語の認知が困難となり、内容理解も促進されなかったのではないかと考える。（『日本語教育』2：83）

- (9)実験の結果、聴解における既知語率の閾値は約9.3%であることが示唆された。小森他(2004)等において、読解の閾値が95～96%であったことを考慮すると、聴解は読解に比べて、やや低い既知語率で内容理解が促進されると考えられる。（『日本語教育』2：76）

判断表現を精確に分類するには、(8)と(9)の判断を区別しなければならない。その

ためには、判断と根拠との関係を詳しく見る必要がある。したがって、本研究では判断根拠の有無という基準のほかに、判断表現の機能を分類基準に加える。ここで、判断表現の機能とは、判断内容と根拠との関係がどのようなものであるかを示す判断表現の働きを意味する。判断表現がどのような機能を果たしているかを見ると、次の4つの機能に分類できる。

- 1) 当然の帰結 根拠から導かれる当然の帰結を表す。判断者の思考が介入しなくとも、根拠から必然的にそのような帰結に至る場合である。

ここに分類されるものには必ず根拠があるが、その根拠が明示的な場合も暗示的な場合もある。

①明示的根拠

(10)前節では中古語における準体型名詞節について観察したが、使用範囲に制限があるという結果と同時に、もう一つ重要な事実が明らかになった。それは、特に主語節において顕著なように、「準体型」を用いることができない範囲を、「コト型」が担ったという事実である。すなわち、「準体型」と「コト型」は、統語的に異なった振る舞いを示すものと考えられる。(『日本語の研究』3:50)

②暗示的根拠

(11)『弥勒』というテキストには「大正教養派」のエッセンスがちりばめられていた…。明治末から昭和初期にかけてショーペンハウアーの著作翻訳が進み、いわゆる「大正教養主義」の時代を背景として一種のブームともなったのは周知の通りである。…戦時中を背景とした『弥勒』というテキストの持つ雰囲気は「大正教養派」と相通じる。昭和十年代に「大正教養派」的な「教養」があったことも少なからぬ事実だろう。(『日本近代文学』6:108)

- 2) 筆者の個人的判断 根拠の有無により2種に分かれる。

①根拠がある場合、筆者が判断の基準として提示している根拠からは複数の判断の可能性が考えられ、筆者の判断がそのうち1つの可能性であるものを指す。

②根拠の提示がない判断はすべてこの個人的な判断と見なした。判断内容が一般的あるいはその専門分野で当然のこととして認められている内容でも、根拠から必然的に導き出せる判断でない場合はこの部類に入れる。

①根拠あり

(i) 明示的根拠

(12)ディクテーション課題で測定したのは音素の連続を正しく認知できたか否かであり、翻訳課題で測定したのは眼前に提示された単語の意味表象を正しく想起できたか否かであった。よって、実験2の内容理解の点数が低かったのは、語

の繰り返し頻度が少なかったため、聴き取った内容を保持しながら次の新たな情報を統合していくという作業が困難になったことが一因ではないかと考えられる。(『日本語教育』2:83)

(ii) 暗示的根拠

(13)「字形」では、直後・1週間後共に辞書使用の効果が見られた。その要因は辞書引きの過程にあると考えられる。(『日本語教育』5:92)

②根拠なし

(14)語彙に比べて文法は変化の速度が遅いと言われるが、それは新しい要素を簡単に取り入れたりせず、語彙から文法へと体系内で漸進的な変化によって文法形式が発達するというのも一つの理由と考えられる。(『日本語の研究』5:3)

(15)既存の秩序を越える言語を獲得しようという<表象への欲望>に憑かれた<青年>は、「無意識」という領域を「意識」によって照らし出し、言語化することを目指している。この「無意識」への探求は、さらなる言語の再-秩序化を促すだろう。(『日本近代文学』1:13)

3) 言い換え 同じことを別の表現で言い換えたものを指す。「言い換えると」「換言すれば」など、根拠を明示する言葉の後に文が続くこともあるが、根拠が明示されず先行文脈で暗示される場合もある。言い換えの基になる部分の存在が前提となるため、必ず根拠がある。

(i) 明示的根拠

(16)上記の例が示すように、～ニ～ヲ形の二格句は、「～の中」のような空間を表す語句をとることができる。これに対して、～ヲ～デ形のデ格句に「～の中」という語句をつけると、デ格句が動作場所の解釈になってしまい、本稿が問題としている～ヲ～デ形とは別の解釈になる。つまり、～ニ～ヲ形の二格句が「～の中」のような空間を表す語句をとれるのに対し、～ヲ～デ形のデ格句はこのような語句をとることができないと言える。(『日本語の研究』1:35)

(ii) 暗示的根拠

(17)メタファーは認知意味論では、異なる概念領域間の写像と定義される。…文法化のもう一つの重要なメカニズムはメトニミーである。これは認知意味論では一つの概念領域内において、注目される部分がシフトすることと定義される。…この意味で、メタファーが概念上の不連続な飛躍によって成り立つのに対し、メトニミーは刻みの細かい、連続的なシフトによって成り立つと言える。(『日本語の研究』5:11)

4) 予想・評価 1) ~ 3) は筆者の研究内容についての記述に見られる判断表現であるが、論文にはほかに研究の評価や今後の予想を表すためにも判断表現が使われている。他の機能とは分類の基準が異なるが、機能の1つとして加える。この種の判断表現は根拠があることもないこともあり、「重要である」「必要である」「肝要である」「有効である」「示唆を与える」などの後に来ることが多い。

(18) このような連続性を捉えること、また、本動詞としての意味と助動詞的有機的な関連性をとらえること、が可能になるという点で、補助動詞の分析に文法化の視点を入れることには意義があると思われる。(『日本語の研究』7:39)

(19) 本研究で明らかになった母語話者評価の実態は、教師と学習者にとって、一つの有益な情報になると考える。(『日本語教育』1:73)

根拠有無の基準と4つの機能の関係は表1のように示すことができる。

表1 根拠の有無の基準と4つの機能

	当然の帰結	個人的判断	言い換え	予想・評価
明示的根拠	○例文 (10)	○例文 (12)	○例文 (16)	○例文 (18)
暗示的根拠	○例文 (11)	○例文 (13)	○例文 (17)	○
根拠なし	×	○例文 (14,15)	×	○例文 (19)

○：あり ×：なし

III. 結 果

各判断表現の出現数

3誌10本の論文に出現した判断表現の総数は463であった。「だろう」の出現が最も多く137 (29.6%)、次いで「と考えられる」129 (27.9%)、「と言える」が123 (26.6%)の順であった。最も少ない表現は「と思う」3 (0.6%)、「と考える」25 (5.4%)であった(図1)。

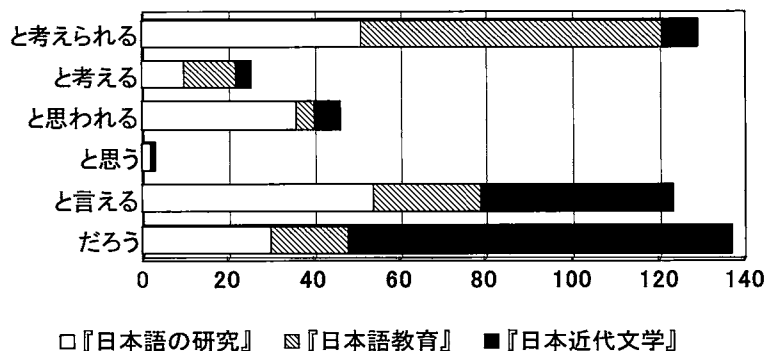


図1 各判断表現の出現数(3誌合計)

各表現の出現数を雑誌間で比較すると、雑誌によって表現の出現率は異なり、有意差が見られた ($p < 0.01$)。『日本近代文学』では、「だろう」が圧倒的に多く89 (58.9%)、『日本語教育』では「と考えられる」が半数を超える70 (54.3%) であった。それに対して、『日本語の研究』では「と言える」54 (29.5%) と「と考えられる」51 (27.5%) が多かった (図2)。

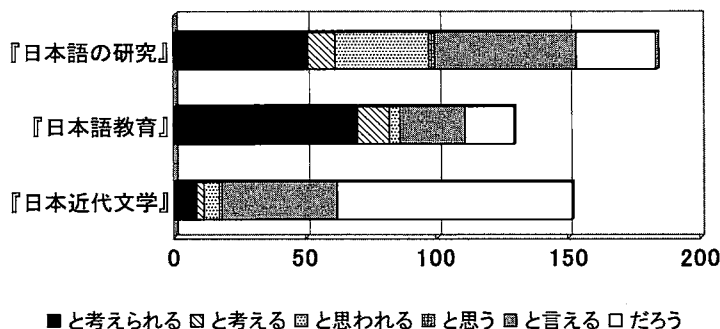


図2 各判断表現の出現数(雑誌別)

文の数を考慮し、100文あたりの各表現の出現率を比較すると、上記の出現数とは順位が異なり、最も数値の高いのは『日本語教育』の「と考えられる」(6.03%)、次いで『日本近代文学』の「だろう」(5.53%) であった。『日本語の研究』では、「と言える」が4.06%、「と考えられる」が3.83%であった (表2)。3誌合計で「だろう」が多いのは『日本近代文学』での比率が高いことを反映していると考えられる。

表2 各雑誌での表現の出現率

	『日本語の研究』 /1330	/100	『日本語教育』 /1160	/100	『日本近代文学』 /1608	/100	3誌合計 /1366	/100
と考えられる	51	3.83	70	6.03	8	0.5	129	3.15
と考える	10	0.75	12	1.03	3	0.19	25	0.61
と思われる	36	2.71	4	0.34	6	0.37	46	1.12
と思う	2	0.15	0	0	1	0.06	3	0.07
と言える	54	4.06	25	2.16	44	2.74	123	3
だろう	30	2.26	18	1.55	89	5.53	137	3.34
合計	183	13.8	129	11.1	151	9.39	463	11.3

木下(1981)は「ト思ウ、ト考エラレルは自分をほかした表現である。〈はっきり言い切る〉たてまえの文書では、責任回避的な表現は避けて『自分は…と想う』『…と考える』と書くべきである」と述べているが、実際の使用状況を見ると、少なくともここで扱った論文では、木下の主張を取り入れている筆者は少なかった。木下(1981)は理系の論文を作成する研究者、エンジニア、学生を対象として書かれたものであるが、理系の論文を扱った佐藤ら(1997)でも「と思う」の使用は少ないと報告されている。

一方、森山(1992)は「と思う」の基本的意味は「個人情報」の表示であるとし、「不確実表示」と「主観明示」の2用法に分けている。本調査で取り上げた「と思う」は、「と思う」がなくても知的意味は変わらないという点で、森山の「主観明示」の用法にあたる。森山によると「主観明示」の「と思う」は個人的な意見や主観的判断であることを示す形式であり、客観的真理を追究するタイプのテキストではふさわしくないと述べている。「と思う」が少ないのは、森山の「と思う」のこのような解釈を反映している可能性がある。

各判断表現における根拠（明示，暗示）の有無の比率

3誌30本に使われている判断表現における根拠の有無を見てみると、明示、暗示合わせて「根拠あり」の比率が62.9%、「根拠なし」が37.1%であった。表現別に見ると、「と言える」は「根拠あり」の比率が93.5%、「と考えられる」62.8%、「だろう」48.9%、「と思われる」41.3%である(図3)。

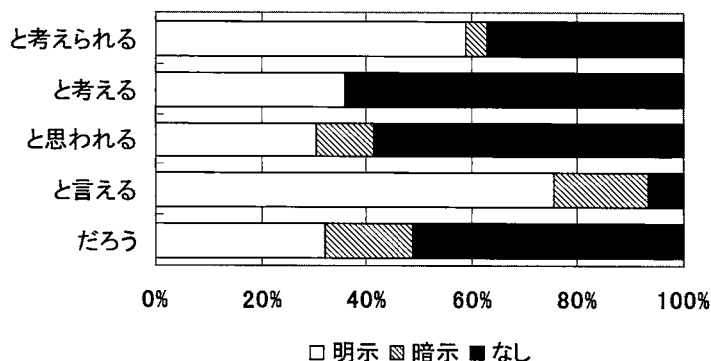


図3 各判断表現における根拠の有無の比率 (3誌合計)

根拠のうち、明示の比率は高い順に「と考えられる」(93.8%)、「と言える」(80.9%)、「と思われる」(73.7%)、「だろう」(65.7%)である。「根拠あり」の比率では、「と言える」が「と考えられる」より高いが、「明示的根拠あり」に限れば、逆に「と考えられる」の比率が「と言える」の比率より高い。なお、「と思う」は100%であるが、出現数は3と非常に少ないので考察から除外する。

佐藤ら(1997)では、工学系論文の調査の中で「と考えられる」「と思われる」「と言える」の根拠提示率を比較し、最も根拠提示率が高いのは「と言える」で、次が「と考えられる」、最も低いのが「と思われる」であることを報告している。本調査でも同様の結果が得られた。「と言える」の根拠提示率が高いのは、森山(2000)の言及と照らし合わせても頷ける。森山は『「と言える」を含む客観的事実を追求するテキストでは、

【データ提示部】無標の事実文→【情報組み替え部】「と言える」のように質的に異なる二つの部分から構成される」としている。【情報組み替え部】とは「と言える」で結ばれる判断部分で、【データ提示部】がその根拠にあたるため、「と言える」はほとんど根拠を伴うのだろう。

各雑誌について見ると、根拠ありの比率は『日本語の研究』が67.2%、『日本語教育』が66.7%、『日本近代文学』が54.3%であった(図4)。

『日本近代文学』では、暗示的根拠の比率が46.3%と、他の雑誌に比べて高いという特徴が見られ、差は有意であった($p < 0.05$)。

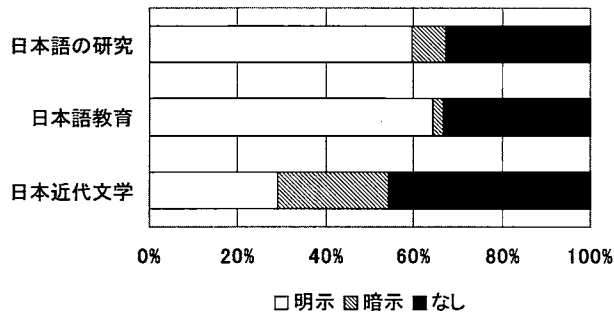


図4 各判断表現における根拠の有無の比率（雑誌別）

各機能の比率と各表現の機能

4 機能のうちどの機能の表現が多く使われているかを見ると、「個人的判断」が半数を超え (55.9%), 次いで「当然の帰結」(26.8%) であった (図5)。

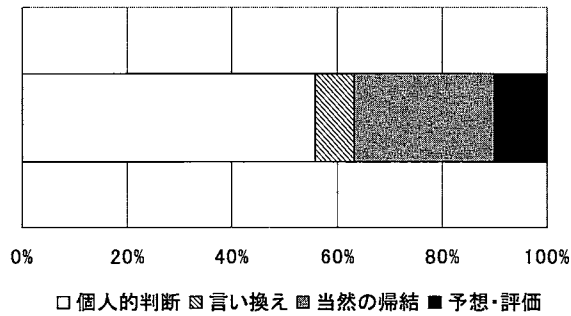


図5 各機能の比率（3誌合計）

「個人的判断」の機能を持つ表現として出現頻度が高いのは、「だろう」(37.8%), 「と考えられる」(30.1%) である (図6)。

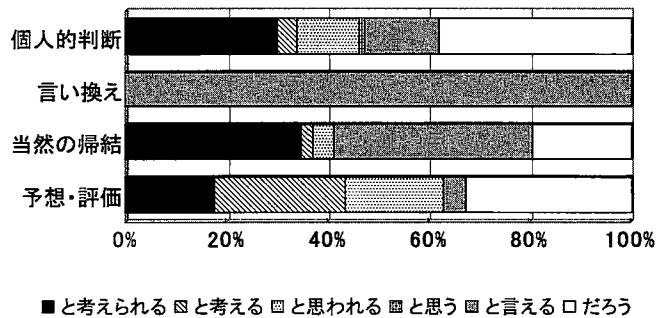


図6 各機能の比率と各表現の機能（3誌合計）

「言い換え」の機能を持つ判断表現としては、すべて「と言える」(100%)が使われていることが特徴的である。「当然の帰結」としては「と言える」(39.5%)、「と考えられる」(34.7%)が多く使われている。「予想・評価」の表現としては、「だろう」(32.6%)、「と考える」(26.1%)、「と思われる」(19.6%)、「と考えられる」(17.4%)と分散している(図6)。それぞれの判断表現でどの機能の比率が多いかを見ると、「だろう」は「個人的判断」が71.5%、「と思われる」は「個人的判断」が69.6%であるが、「と考えられる」は「個人的判断」が60.5%、「当然の帰結」が33.3%、「と言える」は「当然の帰結」39.8%、「個人的判断」30.9%、「言い換え」27.6%と分散している(図7)。

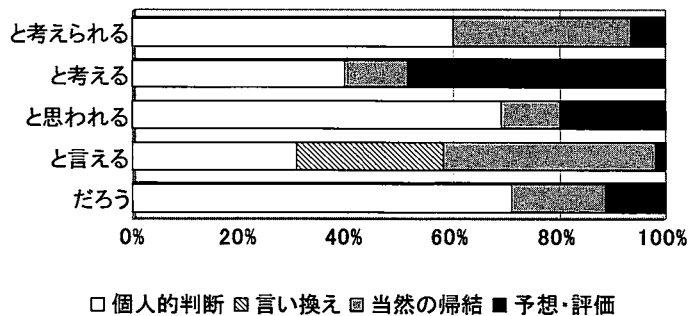


図7 各表現の機能 (3誌合計)

機能について各雑誌を比較すると、3誌とも4機能のうち「個人的判断」が最も多い(図8)。中でも『日本近代文学』は最も多く73.5%(図8)、その65.7%を「だろう」が占める(図9)。

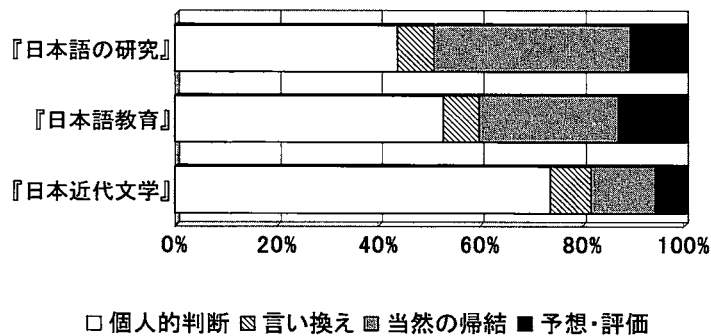


図8 各機能の比率 (雑誌別)

『日本語教育』でも「個人的判断」が半数以上 (52.7%) で (図 8), そのうち「と考えられる」が69.1%を占める (図 9)。『日本語の研究』では、「個人的判断」(43.7%) と「当然の帰結」(38.3%) が多かった (図 8)。しかし、4 機能の比率には 3 誌の間に有意差が見られた ($p < 0.01$)。

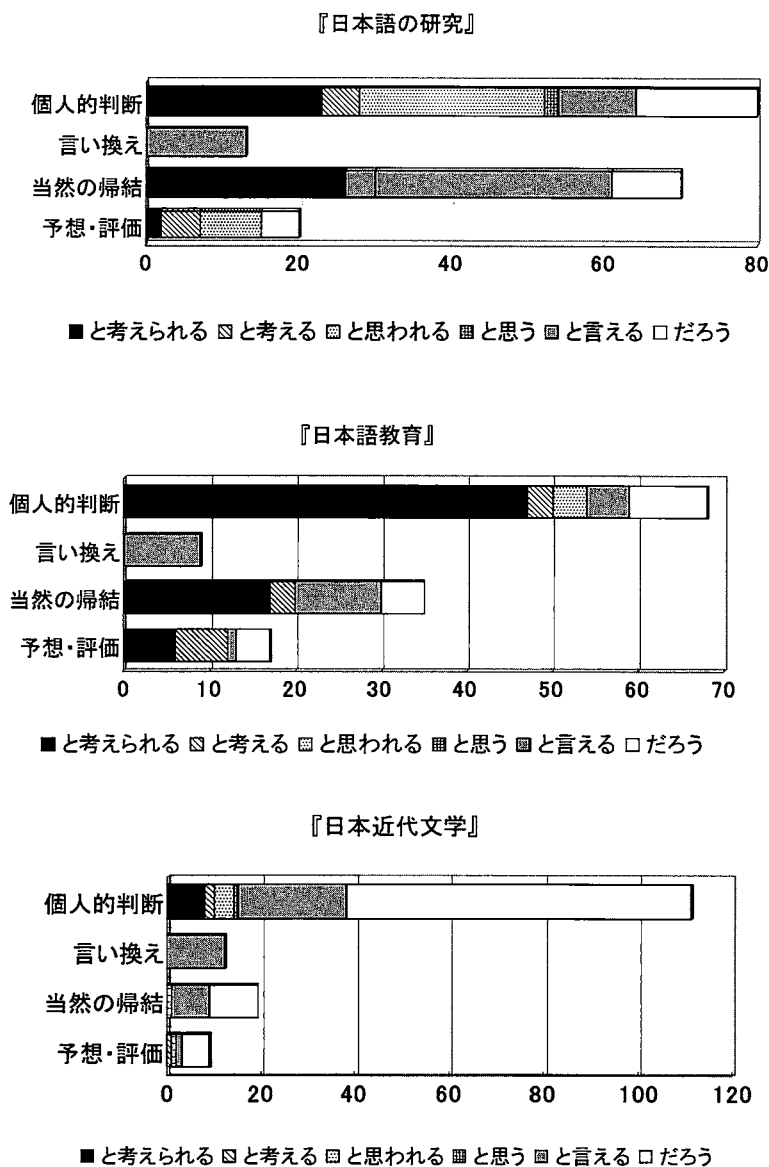


図 9 各機能の出現数

それぞれの判断表現でどの機能の比率が多いかを見ると、雑誌間で差が見られる。『日本語の研究』では「と言える」の57.4%が「当然の帰結」で、「と考えられる」は51.0%が「当然の帰結」、45.1%が「個人的判断」である(図10)。

『日本語教育』では「と考えられる」の67.1%が「個人的判断」で、「と思われる」はすべて「個人的判断」である。『日本近代文学』では、「だろう」の82.0%が「個人的判断」、「と言える」の52.3%も「個人的判断」である(図10)。

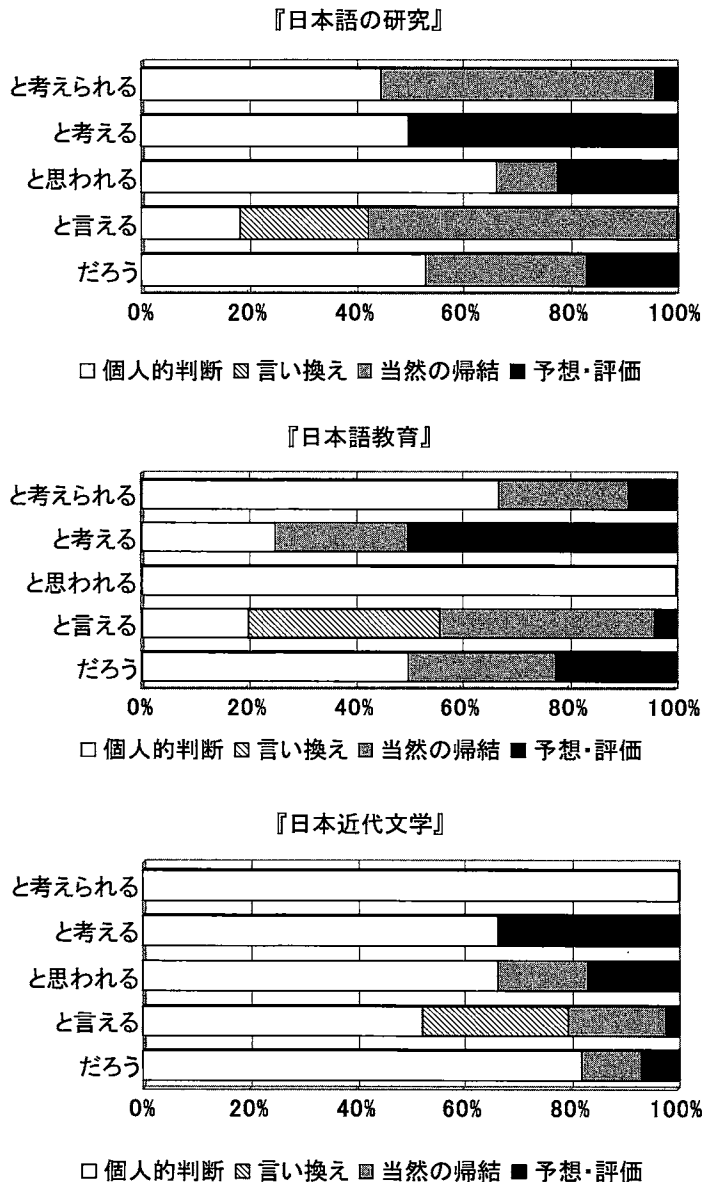


図10 各表現の機能

IV. 考 察

各判断表現の特徴

「だろう」について、寺村（1984）は「ダロウは、概言的表現の中で、自分でこうだと考えるということについて、自分自身は当然何かの拠りどころをもっているのがふつうだが、そのことを相手に知らせる意識はないときに出てくる表現である。その意味で最も主観的ということができる」と述べている。「だろう」のほとんどが「個人的判断」の表現として使われるのは、寺村が指摘するように、「だろう」が主観性の強い表現だということを示していると考えられる。

「と考えられる」は「個人的判断」30.1%、「当然の帰結」34.7%と、ほぼ等しい比率で使われていることがわかる。「と考えられる」の使用が大きく二つの機能に分かれるのはなぜだろうか。佐藤ら（1997）は「と考えられる」には根拠提示がない使用が48.2%あり、根拠ありとなしに分かれている理由として、「と考えられる」には可能と自発の二つの意味があることを挙げている。本調査においても「と考えられる」の機能が二つに分かれたことは、「と考えられる」には可能と自発が同形であることが関わっている可能性がある。「当然の帰結」は根拠から必然的に導かれる帰結であり、「と考えられる」が自発の意味で使われた場合である。「個人的判断」は筆者の判断も一つの可能性であることを指すものであり、可能の意味で使われる場合だろう²。

「と言える」は「当然の帰結」、「個人的判断」、「言い換え」と、複数の機能として使用されている。しかし、「言い換え」の機能はすべて「と言える」という表現として現れていることについては、前述の森山（2000）による「と言える」の機能についての記述で説明できる。森山は、「と言える」は【情報の組み替え部】の表示という基本的機能を持つとしている。そして、解説的にとらえ直したり、言い換えをする場合など、確かなこととして断定するためには「と言える」が必要で、「と考えられる」などは置き換えることができないと述べている。

上のような判断表現の出現状況から、各判断表現の特徴は概略次のようにまとめることができる。「と考えられる」は3誌合計では出現数が「だろう」に次ぐが、『日本近代文学』を除けば最も多い。特に3誌のうちでは理系に近い研究論文が多い『日本語教育』で多く使われている。このことは理系の学術論文の調査で「と考えられる」が多かったという佐藤ら（1997）の報告と考え合わせると興味深い。「明示的根拠」を伴う比率が高いことも特徴的である。機能としては、「個人的判断」の比率が高い「考えられる」は「考える」の可能形でもあり自発形でもあることから、可能の意味で使われる場合と、自発の意味で使われる場合が重複していると考えられる。

「と考える」は出現数25と少なく、「根拠なし」の比率が高い。機能としては「予想・評価」と「個人的判断」でほとんどを占め、主観的な判断表現と言える。

「と思われる」は「と思う」より出現数が多いものの、「と考えられる」と比べると少なく半数以下である。「根拠なし」の比率も60%近く、「個人的判断」の比率が69.5%と高い。

「と思う」は6表現中出現数が3と最も少なく、そのすべてが「根拠なし」で、「個人的判断」である。論文にはあまり使われない表現だと言える。

「と言える」は「根拠あり」の比率が最も高い。機能的には「当然の帰結」「個人的判断」「言い換え」の比率に大きな差はないが、逆に「言い換え」として使われるのは100%「と言える」であることが特徴的である。

「だろう」は3誌合計では出現数が最も多いが、これは『日本近代文学』での出現数が多いことによるものである。『日本近代文学』など文学系の論文では多用されるが、他の分野の論文では出現数はそれほど高くない表現と言える。「根拠あり」と「根拠なし」の比率はほとんど差がないが、機能的には「個人的判断」の比率が71.5%と高く、主観的表現であることを示している。

判断表現の出現傾向と各雑誌の特徴

判断表現と機能の出現状況は雑誌によって異なる。

各雑誌で比率の高い判断表現と機能を挙げると、『日本近代文学』では「だろう」「個人的判断」、『日本語教育』では「と考えられる」「個人的判断」、『日本語の研究』では「と言える」と「と考えられる」、『個人的判断』と「当然の帰結」に分かれる。

各雑誌におけるこのような判断表現の出現状況は、それぞれの分野の論文の特徴がある程度示していると思われる。

『日本近代文学』の論文では文学作品の内容や記述を取り上げて、それについての筆者の解釈や考えを述べるという形で論が進められていくもので、筆者の判断はまさに個人的な判断であることが多い。

『日本語教育』の論文には様々な分野が含まれるが、言語研究的なものより、調査、実験の結果について考察を加える形式のものという形で判断表現「と考えられる」が使われる。そのような場合は、判断を導き出す要因としていくつかの可能性がある中、

2 本研究では、「と考えられる」の自発用法が当然の帰結に、可能用法が「個人的判断」に相当すると考えており、佐藤ら（1997）とは逆である。

筆者の推論も一つの可能性であるという意味で、「と考えられる」の可能形の用法が選ばれるのだろう。佐藤ら（1997）の理系論文の調査では「と考えられる」が多用されていることが報告されており、『日本語教育』も理系に近い特徴を示しているのだろう。

『日本語の研究』の論文は言語現象から理論的に言語の規則性や制約などを求めるものが多く、現象から要因などについて推論をする場合もあれば、現象から論理的に帰結に至る場合もある。このことは、「と言える」と「と考えられる」、「個人的判断」と「当然の帰結」がほぼ同程度出現することと関わりがあると考えられる。

V. まとめと今後の課題

本研究では文系の学術論文に現われる6つの判断表現について、その出現傾向、根拠の有無の比率及び機能との関連を考察した。その結果は次のようにまとめることができる。

- 1 出現の多い判断表現は「だろう」「と考えられる」「と言える」である。
- 2 全体で根拠に基づく判断が62.9%を占める。根拠ありの比率の高い表現は、「と言える」(93.5%)、「と考えられる」(62.8%)である。
- 3 機能で比率の高いのは「個人的判断」(55.9%)、「当然の帰結」(26.8%)である。「個人的判断」の表現として出現頻度が高いのは、「だろう」(37.8%)、「と考えられる」(30.1%)である。「言い換え」の判断表現はすべて「と言える」(100%)である。「当然の帰結」の表現は「と言える」(39.5%)、「と考えられる」(34.7%)である。「予想・評価」の表現は「だろう」(32.6%)、「と考える」(26.1%)、「と思われる」(19.6%)、「と考えられる」(17.4%)と分散している。
- 4 「だろう」は「個人的判断」が71.5%、「と思われる」は「個人的判断」が69.6%であるが、「と考えられる」は「個人的判断」が60.5%、「当然の帰結」が33.3%、「と言える」は「当然の帰結」39.8%、「個人的判断」30.9%、「言い換え」27.6%と分散している。
- 5 各雑誌における判断表現の出現傾向はそれぞれの分野の論文の特徴を示している。

本研究で調査したのは6つの判断表現であったが、今後は調査する判断表現の種類を増やす。さらに、判断表現が重複して使用されている場合についても調査する。また、対象とする雑誌の分野を広げ、分野ごとの特徴があればそれらを明らかにしていく。

【参考文献】

- 木戸 光子 (2006) 「作文における『客観的表現』とは何か」『日本語教育学会春期大会予稿集』 pp.127-132
- 木下 是雄 (1981) 『理科系の作文技術』中央公論社
- 佐藤勢紀子・仁科 浩美 (1997) 「工学系学術論文における『と考えられる』の機能」『日本語教育』93号 pp.61-72
- 寺村 秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- 古本 裕子・苗田 敏美・八重澤美知子・川西琢也 (2005) 「工学を専門とする日本人学生が書いた文章に見られる基礎的な問題点」『専門日本語教育研究』第7号 pp.47-52
- 森山 卓郎 (1992) 「文末思考動詞『思う』をめぐって—文の意味としての主観性・客観性—」『日本語学』11巻9号 pp.105-116
- (2000) 「『と言える』をめぐって—テキストにおける客観的妥当性の承認—」『言語研究』118号 pp.55-78

【付表】 調査資料

雑誌名	論文番号	出版年	号	ページ	著者	題名
日本語教育	1	2005	125	67-75	渡部倫子	日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の評価—共分散構造分析による評価基準の解明—
	2	2005	125	76-85	三国純子ら	聴解における語彙知識の量的側面が内容理解に及ぼす影響—読解との比較から—
	3	2005	125	57-66	松崎 寛ら	アクセントの体系的教育を目的とした音声評価研究
	4	2005	125	28-37	ソルヴァン・ハリーら	「と」「ば」「たら」「なら」再考
	5	2005	125	86-95	平塚真理ら	漢字学習における漢字辞書使用の効果—非漢字圏初級学習者を対象に—
	6	2005	125	96-105	加藤稔人	中国語母語話者による日本語の漢語習得—他言語話者との習得過程の違い—
	7	2006	129	1-10	島田めぐみ	日本語聴解テストにおいて難易度に影響を与える要因
	8	2004	122	42-51	庄司恵雄ら	大規模口頭能力試験における分析的評価の試み
	9	2004	123	56-65	菅谷奈津恵	文法テストによる日本語学習者のアスペクト習得研究—L1の役割の検討—
	10	2004	122	32-41	菊岡由夏	第二言語の教室における相互行為—“favorite phrase の使いまわし”という現象を通して—
日本語の研究	1	2006	2巻号1	32-46	川野靖子	現代日本語における位置変化構文と状態変化構文の交替現象—格成分の対応の仕方—
	2	2005	1巻号3	77-89	日高水穂	方言における文法化—東北方言の文法化の地域差をめぐって—
	3	2005	1巻号3	47-58	青木博史	複文における名詞節の歴史
	4	2005	1巻号3	174-182	小林賢次	条件表現史に見る文法化の過程
	5	2005	1巻号3	1-15	大堀寿夫	日本語の文法化研究にあたって—概観と理論的課題—
	6	2005	1巻号3	108-119	ハイコ・ナロック	日本語の文法化の形態論的側面
	7	2005	1巻号3	61-75	三宅知宏	現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって—
	8	2005	1巻号3	18-30	金水 敏	日本語敬語の文法化と意味変化
	9	2006	2巻号1	1-14	内丸裕佳子	動詞のテ形を伴う節の統語構造について—付加構造と等位構造との対立を中心に—
	10	2005	1巻号3	32-45	渋谷勝己	日本語可能形式に見る文法化の諸相
日本近代文学	1	2004	第71集	1-15	生方智子	表象する<青年>たち—『三四郎』『青年』—
	33-47			永井敦子	探偵小説の中<監視権力>—谷崎潤一郎「途上」における探偵と被疑者—	
	48-62			田中絵美利	志賀直哉「雨蛙」論—<男>たちの<美しい夫婦の物語>—	
	63-78			村瀬甲治	「図書館幻想」論—宮澤賢治における書記／読書行為の空間構成—	
	79-94			名木橋忠大	立原道造「中間者」の誕生—「方法論」とオスカー・ベッカー「美の果無さと芸術家の冒険性」を通して—	
	95-110			高橋孝次	稲垣足穂「弥勒」論—『ショーペンハウエル随想録』をめぐって—	
	111-124			野田康文	大岡昇平『俘虜記』の創作方法—背景としての記録文学—	
	125-139			小嶋洋輔	『沈黙』と時代—第二バチカン公会議を視座として—	
	141-156			孫 軍悦	<誤訳>のなかの真理—中国における『ノルウェイの森』の翻訳と受容—	
	157-172			内海紀子	テキストにおけるクロス＝ジェンダード・パフォーマンス—太宰治『女生徒』から篠原一「ゴージャス」まで—	

How the expressions of judgment are used in the academic papers in the field of liberal arts

Sachiko Hayakawa, Yuko Furumoto,
Toshimi Noda, Michiko Matsushita
and Takao Okazawa

Abstract This study investigates how six expressions of judgment (*to kangaerareru*, *to kangaeru*, *to omowareru*, *to omou*, *to ieru*, *daroo*) are used in the academic papers in three journals of liberal arts (*Nihongo no Kenkyuu*, *Nihongo Kyouiku*, *Nihon Kindai Bungaku*) . 463 instances of these expressions which appeared in 30 papers were classified by two criteria ; 1) whether or not the judgment is made on ground and 2) what function these expressions have. The findings are as follows : ① *Daroo*, *to kangaerareru*, *to ieru* are used with highest frequency. ② 62.9% of judgment is made on ground. ③ Regarding function, expressions of "arbitrary judgment" appeared most frequently, and those of "logical conclusion" follow.

④ The function of "rephrasing" is represented only by *to ieru*. ⑤ Frequency of use differs from one journal to another, and this difference reflects the feature of each field of study.